

元商社マンは南紀・白浜の温泉付き住宅地に定住

南紀白浜の高台に温泉付き住宅が建ち並んでいて、そのうちの戸が前田文彦さんのお宅であった。五十四歳のとき、いっさいの仕事からはなれ、大阪からこの地に移り住んだという。ここを、別荘地でなく定住地としたのである。

「仕事への未練？それはなかった。もう働きすぎるほど働いたという思いでしたね」

商社マンとして三十二年間、江商（現・兼松江商）と住友商事で繊維を担当した。海外駐在は香港、インドネシア、ガーナ、ナイジェリア、旧西ドイツ、イラン、イラクなど十三年間におよんでいる。

十九年間勤めた江商であったが、兼松に吸収されるにあたって、「クビを切るのもいや、切られるのもいや」との理由で住友商事に転じた。住友商事ではもっぱら中近東との合併事業に取り組み、テヘラーン―大阪間を二年間で三回も往復した。

一病息災といふべきか、五十歳を過ぎてから前田さんは神経痛に悩まされるようになった。どうやら湿度も湿度も急に変わる異国で長年過ごし、エアコンに馴れきった生活が禍いしたらしい。

■ 晩昼朝 湯入の間時一各、
神経痛には即効的な治療法がなく温泉につかって気長に治すのがいいといわれていた。帰国後、前田さんは南紀・白浜温泉へおもむき、朝昼晩の各一時



したからね。プライベートの時間もなく、朝から晩までビジネスばかり。九時―五時のサラリーマンよりも、二倍も三倍もよけいに勤めたような気がします。あの時五十四歳でしたが、もう

定年にしてもいいんじゃないかと思いましたが「さまざま事情が重なり合って、辞表をしたためた。」

■ 意決！ 憲決 を住移らるか 験体実の治湯

折から白浜で別荘分譲地が売り出されていた。温泉つきで、その水質は椿温泉のものと同じという。

費用は大阪市内の自宅を売却して捻出するにしても、それ以降、厚生年金が支給される六十歳までの、無収入の生活をいかにして維持するのか。他人事ではあるが気になるところである。

「波乗りゲームみたいなもんです。」

自宅を売却した残金、退職金、海外駐在中に手をつけずにおいた十三年間のボーナス、その他の預貯金など約五千万円が手元にあった。これを取りくずすのではなく、郵便貯金にしたり国債を買うなどして、利子で生活ができるようはかったのである。高金利の波は十年に一度、小刻みな波は五年に一度、それぞれ押し寄せると承知していた。

白浜移住については、奥さんにも考えてもらった。すでに二人の子は育ち、子育てからも解放されたとあって、ことさら異を唱えなかったという。

家屋の裏には百三十坪の町有林が広がっている。庭は菜園になっていて、ナスやキュウリなど野菜のほかに四十本の果樹が植えられている。なるほど風光明媚ではあるが、走りつづけてきた元商社マンからすると、こののどかさにはときに退屈をもたらすのではなからうか。だが「それはいいですね」と前田さんは言う。

かつては新地にビジネスチャンスを見つけた。在職中にはぐくまれたこの能力によって、いまは仕事にかわる楽しみを見つけた。

「ここにきてから、ついつい釣りと油絵にのめりこみまして・・・」と新たな能力を開花させた様子であった。「友田 記」



温泉イメージ写真

(週刊文春記事「待ってました定年」第327話より抜粋)